

# 英語教師はフィリピンで何をみたか

— スタディツアーの取り組みから —

浅川 和也

On a study tour for Japanese English teachers to the Philippines

Kazuya Asakawa

キーワード：英語教育、フィリピン、スタディツアー

Key-words: English Education, the Philippines, Study tour

Synopsis:

Networking in Asia by Japanese English Teachers is an alternative action for EFL. This paper is to introduce a challenging international exchange project by a group of Japanese English Teachers and NGO in the Philippines. The study tour to the Philippines has made since 1988 and the group visited the NGO, high schools and community. The program bring Japanese English teachers to the Philippines would be widened their perspectives. Insights from observation will be shared and possible further action will be discussed. Non-formal education by NGOs has vital role in the Philippines as well as a formal education at school. At the grassroots level a training module for people's empowerment is spreading. NGO in Manila, PEPE (Popular Education for the Peoples Empowerment) obtained a workshop at this exchange project. The experience may promote global awareness, international understanding and action for world problems.

## 1. はじめに

英語教師対象の研修は、英国や北米、豪、NZなどで行われることが多い。ブリティッシュカウンシルや国際教育交換協議会などの団体、旅行会社によるものなどがある。それらの内容は、海外の大学や大学附属の研修機関で語学や教授方法を学ぶことや、教材にとりあげられている名所旧跡を実際に見聞してくるというのが主なところだ。一方、東京YMCAはかつてシンガポールで英語教授法の研修を行ったことがある。また、近年ではアクロスが中国へ、松香フォニックス研究所が韓国、またグローブインターナショナルがエチオピアへのツアーを行うなど、さまざまな研修が企画、実施されている。

英語は、現在、多様になり、世界のさまざまな地域で通用している。英国や米国の旧植民地

では、英語を公用語としているところも少なくない。そのような事情を身をもって体験するのに、フィリピンを選んだ。フィリピンは地理的にも近く、これまでもさまざまな交流がなされてきているので、そうした経験を生かすことができると思われた。以下、このスタディツアーの概要と成果、課題について述べる。

## 2. スタディツアー

スタディツアーは開発 NGO が現地を支援者とともに訪ねるツアーである。ALL About Japan : <http://allabout.co.jp/study/homestay/closeup/CU20030605/> でもとりあげられている。

スタディツアーを行っている NGO や旅行会社関係者を中心にスタディツアー研究会（通称：STAR 研）が1997年5月に発足した。スタディツアーの質的向上により、地球市民の育成をはかり、開発協りに寄与することを目的に活動している。フィリピンへのスタディツアーも多い。

一般の教師対象の研修旅行として、JICA（国際協力事業団）などの団体によるものがある。国際理解教育学会でも視察旅行を行っており、また、国際協力 NGO が行うスタディツアーがある。スタディツアーは NGO の支援者が実際に現地に足を運ぶことによって、活動への理解を深めることを目的の一つとし、いわば教育的機能を持つものである。しかし、参加者が十分な理解を持たないまま参加したり、現地が訪問者を受け入れることの負担もあるとの問題が指摘され、そのあり方も問われている。

## 3. フィリピン教育訪問

フィリピンは隣国ではあるが、その教育事情はあまり知られていない。街の大きなショッピングモールには映画館がいくつも入っていて、字幕なしで欧米の映画が上映されており、高校生にとっても映画を見ることが一番の娯楽ということからも英語の浸透度は相当なものだということも推測できる。もちろん、英語を共通語とすることは是非は問われなければならないし、都市と農村部との格差もあり、一概にはいえないが、歴史的経緯もあり、フィリピンでは中等教育を受けた者は英語でコミュニケーションができ、交流もはかることが可能であるように思われる。

APSBE（アジア太平洋成人教育会議）との関連で、ケソン市にある Popular Education for People's Empowerment (PEPE) という教育 NGO の協力より英語教師を対象にフィリピンへのツアーをグローバル英語教育研究会 (AGEnT) として取り組んでいる。2002年には、ケソン市・ミリウム大学で行なわれた IIPE への参加としたので、1998年から、毎年、夏、フィリピンを訪問したことになる。2003年5月には、アテネオ大学から教師を招へいた。また、2003年のツアーには、国際交流基金より助成を得ている\*。

実施年度と参加者（ほかコーディネータ1名）、テーマは以下のとおり。

- 1998年3月、参加者：6名（高3、大3）、テーマ：学校教育
- 1999年1月、参加者：7名（中2、大3、NGO職員1、学生1）、テーマ：開発、労働問題
- 2000年8月、参加者：9名（高3、大4、NGO職員1、学生1）、テーマ：戦争加害「従軍慰安婦」問題、子どもの教育
- 2001年8月、参加者：8名（中3、高3、大2）、テーマ：先住民族の人権、授業交流
- 2002年8月、IPE（国際平和研究所）サマーセミナー、於ミリアム大学・ケソン市
- 2003年8月、参加者：4名（中1、大2、NGO職員1）、テーマ：日比混血児、貧困

当初は、こちらの要望を調整にあたった現地 NGO（PEPE）に伝え、PEPE のつながりのなかでプランが用意された。PEPE もフォーマルな学校機関とのアクセスがなく、学校訪問については手探りであったようだ。

2 回目はより具体的な現実にあふれるということで、教会関係のネットワークによりカルバルソン計画で問題となった輸出加工区の労働者を支援している団体に連絡をとり、訪問するとともに、一部労働者の部屋に泊まることもできた。

3 回目は、過去の戦争を学ぶことも視野に入れ、元従軍慰安婦の支援をしている団体と交流をし、日本軍が焼き払った村を訪れ、被害者の方々にも会った。また、PEPE の担当者がかかったこともあって、1 回、2 回目の経験を生かすことが難しいようであったが、学校訪問でも PETA（フィリピン演劇教育協会）で活動をした教師がかかわる学校を訪れることができた。

4 回目は、学校訪問では、以前、訪れた高校で写真をみて大切なものは何かをだしあうアクティビティをさせてもらった。加えて、PEPE が山岳先住民族の地域開発にかかわり、辞書づくりをしている現場を訪問するというで計画したが、台風の影響で北部ルソンの玄関であるバギオで足止めとなった。バギオでは、少数民族の人権問題にかかわる NGO を訪問した。

6 回目は、日本とのかかわりから、近年、社会問題になっている日比混血児を支援している団体を訪ねた。また、都市がかかえる問題の一つとして、パヤタスを訪問した。

#### 4. 参加者の感想から

2003 年に参加した中学校教師が自分の生徒向けに書いた文章を紹介する。

毎日の予定はびっしり決まっていて、たくさんの NGO の事務所を訪問して情報を交換したり、大学や高校にも行きました。高校では授業を見学させてもらい、先生たちと話をし、生徒会の役員の生徒たちとも語り合うことができました。フィリピンは雨季と乾季にわかれており、8 月は雨季。一番暑い 4、5 月が夏休みだそうです。教育制度は小学校—高校—大学が 6—4—4 年で大学入学は 16 歳。家の中や友だち同士では土地のことばで話している

が、授業や一步町へ出ると『英語』で、学校を出ている人は英語を普通に話します。町の看板や交通標識も英語で英語社会なのだということを知りました。今回の訪問で、実にたくさんの人と出会い、話し合いましたが、日本人以外とはすべて英語でした。本当に初めて知ったことばかりでした。

行く前に、本を何冊か読んでにわか勉強をしました。フィリピンでは国立博物館や歴史博物館などにも行き、歴史の勉強もしました。日本とは昔から関わりがあったのですが、江戸時代、アジア・太平洋戦争での侵略・虐殺、そして現在と深いつながりがあります。第一、顔がとてとても似ています。日本人の祖先の源流が南方にあったということをしみじみ実感しました。

フィリピンは400年間スペインに植民地にされ、スペインを相手に独立運動があり、19世紀のおわりにスペインがアメリカに負けて、アメリカがフィリピンを買いました。そしてフィリピンが独立しました。ですから、フィリピンはスペインやアメリカの影響をたくさん受けています。現在英語を使っていることもそのひとつです。もちろん、たくさん血がまざっています。

フィリピンは島国です。87の言語があり、主な言語は8つだそうです。そのひとつがタガログ語。ということは、たくさん文化があるということになります。ほとんどのフィリピン人はカトリック（キリスト教）を信仰していますが、南部の人たちはイスラム教です。

4日目に首都のマニラから北20kmにあるパヤタスというところに出かけました。そこはマニラで出るゴミの巨大な集積所です。マニラではゴミを燃やすことが禁じられているので、1日550台のトラックがゴミを捨てにきます。そのゴミの中から缶やプラスチックなど金になるものを、よりわけて拾い、生活しているたくさんの方がいます。子どももたくさん混じっています。そこは谷がだんだん埋め立てられて山になってしまっているところで、今は閉鎖されてしまったスモーカーマウンテン（アジア最大のスラム、世界3大スラムのひとつ言われた）にかわって、「スモーカーバレー」と呼ばれています。ゴミの山の周りには何万人もの人が住み、ゴミを生活の糧にしているのです。1日の平均収入は500～600円とか…衛生状態は悪く、病気が発生したり、障害をもって生まれてくる子どもの確率も高い。そして、悪臭があたり一帯を漂っていました。行きたくとも学校に行けない子どもも多く、ゴミを運ぶトラックに轢かれる子どももいるといえます。3年前に大雨でゴミの山がくずれ、1000人もの人が生き埋めになった事件がありました。今、ゴミからしみでた毒による地下水の汚染が問題になっています。

私たちは、そこに居をかまえて活動している33歳の牧師さんから話を聞き、住民を支援する集会所や保育所を案内してもらいました。車椅子や手のない若い先生が、耳が聞こえなかったり、話せない子どもたちを教えているところにも連れて行ってもらいました。ドイツ

人の医者や診療所で働いているそうです。おりしも土砂降りの雨になり、泥だらけの道をトラックが通っていきます。かぎのついた金属の棒を持った子どもが濡れながら歩いています。家は、とても家とはいえないものです。写真にとっては申し訳ない気がして、シャッターは押せませんでした。以前、見たドキュメンタリー映画『神の子たち』（四ノ宮浩監督）のなかで、パヤタスの住人が言った言葉を思い出しました。「泥棒するくらいなら死んだ方がましだ。」誇り高い人だと思いましたが、生きるためには犯罪を犯すこともあって不思議はないと思いました。

フィリピンは貧富の差がとても大きいと聞いています。パヤタスだけでなく、道路から見えるだけでも屋根と柱しかないような貧しい家があちこちにありました。また、大人や子どもの物売りが、街頭や車が走っている道路の真ん中で、新聞、飲み物、お菓子、サンパギータの首飾り、たばこ（1本から）などを売っていました。どれだけ売れるのか心配してしまいました。

それでも道路はどこも交通渋滞。車はよくなった、と言います。乗り合いバスのようなジープニーが数え切れないほど走り、タクシーがわりの三輪車がよく利用されています。なぜか自転車に乗っている人はほとんど見かけませんでした。

フィリピンでは学校を卒業しても職がなく、また教員の給料も大変低いとのことで、教員を辞めて香港でメイドとして働いたり、看護婦の資格があってもアメリカで病院の下働きをして、家族に仕送りをしたりしている人が多いそうです。フィリピンの人は家族や身内をととても大事にするということです。しかし、圧倒的多数の女性は日本に来てクラブなどで働いているそうです。男性は船乗りが多い。結婚する・しないにかかわらず子どもが生まれて、父親が面倒をみない（みられない）ために、日本やフィリピンの学校でいじめられたりしている子どもを援助している3つのグループを訪問しました。そのうちのひとつでは混血の子どもたちに会いました。うち9人が日本に来てミュージカルをやります。

たった8日間でしたが、たくさんの人に会い、いろいろな人のお世話になりました。珍しいこともあれば、ショッキングなこともありました。気がつかないこと、知らないこともたくさんあるはずです。（府川 幹夫）

## 5. 英語教師はフィリピンで何をみたか

英語教師対象のスタディツアーであるが、訪問先は学校とは限らない。PEPEのようなポピュラーエデュケーションを実践している団体やNGOの協力により、貧困や歴史の場を歩き、現実を目の当たりにし、生活のなかから学ぶということは大きな意義がある。本ツアーの目的は以下のとおりである。

- ・フィリピンの歴史、社会的現実を知り、課題を認識する。

- ・英語の多様性（フィリピン英語）を知る。
- ・フィリピンで英語が使われているということを経験し、実際にコミュニケーションをはかる。
- ・ポピュラーエデュケーションの学習方法を体験する。
- ・フィリピンでの経験を教育や授業に生かす。

参加者がツアーで「知って、経験して、生かす」ことができたか、評価は充分ではない。もともとこのようなツアーに参加する教師の関心は、一般の者よりは、アジアに対して好意的に受けとめているようだが、事前のワークでは現地に関する知識は乏しく、現地での経験をへて変化する。同時に例えば「現地の人々に大きな影響を与え続けている日本について再考する始点となる。フィリピンの開発計画について、日本のODA政策について、企業進出についてなど」のように関心がひろがったという。事後のワークショップで、次の3点が、今後、深める課題とされた。

- a. 日本とフィリピンの学校文化～他者を受け入れる文化を創るために
- b. ことば～英語、コミュニケーションについて考える
- c. 『戦争』をどう学ぶか

例えば、a. からは次の問いかけができた。b. c. についても深めたい。

- (1) どんなコミュニティーも参加者の多様性と共生の課題があり、学校もその一つ。
- (2) 日本の学校文化は“違い”に対してどのような価値観や態度をもっているのか。
- (3) フィリピンの子は日本の学校では疎外感を感じ、フィリピンの学校では受け入れられたと感じた。日本の子どもたちにとっても学校は息苦しい場になっていないだろうか。
- (4) どんな状況の子どもにも安心して学ぶことのできる学校に必要なこと（考え方）、そのために教師／生徒／親や地域の人々ができることは何か。

## 6. おわりに

参加者の関心によって訪問先を決めるようにしてきたことは、よい点でもあるが、継続性に欠ける。私たちと協力関係にあるPEPEというカウンターパートは持っているものの、活動対象地域があるわけではないので、継続的な関与を現地とできているわけではない。しかし、実施をかさねるなかで関係ができていく学校もあり、第4回のツアーの学校訪問では、こちら側が用意をしたワークショップを、高校生を相手に実施するという試みもした。

PEPEスタッフは国際NGOとして活動をしているように、当事者とは距離はあるようだ。参加者からフィリピン社会と言語あるいは英語などへの関心を出していくなかでさまざまな問題を浮きぼりにすることができるといえよう。

開発NGOの場合、支援先との交流があるなかでスタディツアーが組まれるのが通例である。しかし、日程の関係もあり、PEPEが活動する実際の地域の現場を訪ねることはできていない。

単に団体を訪問することで終わってしまった感がある。教材づくりにつなげることや、事前研修や事後の活動を行うことなど、参加者の経験を継続的につないでいくための取り組みも必要だ。

スタディツアーばかりでないが国際理解には「知る、みる、つくる、つながる」というプロセスがある。今後、参加者が得たものを具体的な形にするような教材づくりもすすめたい。

\*「日本 ASEAN 交流年 2003」国際交流基金アジアセンター・アジア草の根交流助成「フィリピン理解の英語教育-ポピュラーエデュケーションとの連携による」